薬史レター

(薬史学会通信改題)

第45号

日本薬史学会　JSHP　2007年5月

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16　(財) 学会誌刊行センター内 日本薬史学会事務局

TEL (03)3817-5821　FAX (03)3817-5830　URL *http://yakushi.umin.jp/*

日本薬史学会2007年会のお知らせ

薬史レター第44号で告示したように、本年度の年会は長崎市で開催されます。

1857(安政4)年にオランダ海軍軍医ポンペが第2次海軍伝習教官隊とともに長崎に到着した時、幕府はポンペに医学伝習の教官となることをオランダ商館長に依頼しました。医学伝習所は9月26日(太陽暦の1857年11月12日)に日本で最初の西洋式の医学教育を行う学校として開設されて、現在の長崎大学医学部へと発展しました。

これに因んで本年11月9日(金)、10日(土)の両日に、西洋医学発祥150周年記念・長崎大学医学部創立150周年記念行事としての国際学会に合わせて11月11日(日)に、日本医史学会秋季大会、日本薬史学会年会、洋学史学会大会が隣接する会場での合同大会を開催することが企画されました。

11月9日と10日午前：記念国際シンポジウム(カンファレンス)でポンペ或いはそれ以前に出島の和蘭商館長を勤めたヨーロッパ人との交流により医学を中心とした科学技術導入が行われたことをテーマとしてオランダ、ドイツの研究者を交えた研究発表が行われます。

海外よりの参加予定者

Dr. Harmen Beukers(Leiden University), Dr. Annete I. Bierman(President of the society of history of pharmacy in the Netherlands and Belgium), Dr. H. J. Moeshart(Leiden University), Dr. A. A. Lemmers(The National Institute for military history, the Netherlands), Dr. Andreas Mettenleiter(Wuerzburg University)

11月10日午後：西洋医学教育発祥150年記念・長崎大学医学部創立150年記念式典。晩餐会。

11月11日：三学会の合同大会の発表は日本語で行います。上記三学会の一つに参加登録すれば各会場の聴講が可能です。夜は市民公開講座が開催されます。

最終的なプログラムが決定されていませんが、現在、入手しているスケジュールと演題募集についてお知らせします。

シンポジウム

A. 長崎遊学　B. 本草から植物学へ　C. 長崎と薬　D. 近代薬学の夜明け

市民公開講座　近代科学と医学の先駆者達

2007 (平成 19) 年日本薬史学会年会

(日本医史学会・日本薬史学会・洋学史学会合同大会)

研究発表演題の募集

日　　時：平成 19 年 11 月 11 日(日)　8:40～

年 会 長：芳本　忠(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科)

会　　場：長崎大学医学部(長崎市坂本 1 丁目 12-1)
(JR 長崎本線「浦上駅」下車、徒歩 15 分又は路面電車「浜口町」下車徒歩 10 分)

主　　催：日本薬史学会

共　　催：長崎大学薬学部

協　　賛：中富記念くすり博物館・長崎県薬剤師会・長崎県病院薬剤師会・長崎市薬剤師会・財団法人長薬協会

研究発表：口頭発表(1 演題 20 分：発表・質疑応答)

申込方法：E-mail、郵便又は FAX で下記項目を記入し年会事務局へお送りください。
郵便の場合下記 (1) 発表申込用紙と (2) 官製はがきを同封し下記申込先へ郵送ください。
(1)「日本薬史学会年会研究発表申込」とプリント印字した A4 用紙に、プリント印字で、下記の 1、2、3、の順で記入してください。
1. 研究発表演題
2. 研究者全員の氏名(発表者に○)と所属
3. 連絡先・住所・氏名・電話・FAX・E-mail
(2) 官製はがき・申込受理用(返信先住所記載のこと)
講演用紙記述用の所定の用紙などをお送りします。
E-mail の場合、添付文書にせず、直接メールに必要事項を記入し送信ください。
なお、発表者は発表申込時点で日本薬史学会会員に限ります。

発表演題申込の締切：平成 19 年 7 月 31 日(火)(必着)

発表要旨提出の締切：平成 19 年 9 月 15 日(土)(必着)

年会参加申込：年会参加申込等については、後日ご案内します。

年会事務局：連絡先；長崎大学薬学部　黒田　直敬
〒852-8521 長崎市文教町 1-14
電話：095-819-2894　　FAX：095-819-2444
E-mail：n-kuro@nagasaki-u.ac.jp

会　　費：①国際会議と 2007 年度日本薬史学会年会：￥10,000 (3 日間)
②日本薬史学会年会(11 月 11 日)のみ　　：￥3,000
③晩餐会(10 日夜)　　：￥10,000

日本薬史学会・平成19年度理事・評議員会・総会 終わる

本会の平成19年度総会が、平成19年4月14日(土)東京大学大学院薬学研究科総合研究棟講堂(13:30～14:30)で開催された。出席者は、約70名で盛会であった。

議事内容は、平成18年度の事業報告と収支決算について、それぞれ説明があり、これらに対する会計監査報告も、適正である旨が報告された。

次いで、平成19年度事業計画案と同事業予算案について説明された。山川議長からは、特に会誌への積極的な投稿を要請する旨のお願いがあった。これらの議題を一括議決した結果、理事の提案した議案は、総会ですべて承認された。

なお、総会に先立ち、理事・評議員会が行われ、同一の議題が承認されたことが報告された。

議事終了後、第2回の日本薬史学会賞の授与式が行われた。今回は、大阪大学医学部 米田氏が受賞された。

また、平成19年会(11月)会長である芳本忠教授より、長崎での年会の内容について説明があり、会員多数の参加が要望された。

総会終了後、今年は、下記三題の講演(14:45～17:30)が行われた。

薬史学会賞受賞講演として、大阪大学医学部 米田該典氏により、「緒方洪庵の薬箱とその生薬」と題した講演が、二番目に、総会講演として、内山 充氏による「評価科学提唱への道のりと近代化社会における役割について」、三番目が、ソウル大学校薬学大学 沈昌求教授による特別講演「韓国薬学の歴史」である。

講演会終了後、東京大学山上会館にて懇親会を催した。

薬史学会賞受賞者　米田　該典先生
(向かって右)
総会講演演者　内山　充先生
(向かって左)

向かって右より　山川　浩司会長
特別講演者　沈　昌求先生
奥田　　潤理事
津谷喜一郎副会長

米田　該典(よねだ かいすけ)先生に日本薬史学会賞 授賞

米田該典先生は1943(昭和18年)神戸のお生まれで、1963(昭和38)年に大阪大学薬学部に入学され、学部・大学院と進まれました。ご専攻は生薬学で、指導教官は、博覧強記で有名な高橋真太郎先生でした。

高橋先生は、故朝比奈泰彦先生の門下生として、戦前から生薬学の世界でその名を知られており、特に大戦中の1940(昭和15)年、当時の日本学士院が明治前日本科学史編集の一環として、「明治前薬物学史」が企画されたとき、「中国の薬物療法とその影響」の項目を担当され、古今に無類の論文を書かれました。また、終戦直後にも日本薬学の実情を憂い、その改革を熱心に説き、研究室には熱い雰囲気が充満していました。また教室の先輩には、後に富山医科薬科大学和漢薬研究所の創設に参加した、故難波恒雄先生なども居られ、米田先生は、厳しさと同時に人間味溢れる環境の中で基礎学を固められました。

しかし米田先生は大阪大学助手就任の当年、恩師高橋先生の急逝に遭い、米田先生の苦難な学究生活が始まりました。当時日本の薬学界では、教育研究改革の一環として、伝統的生薬学が軽視される傾向にあり、一方、伝統医学的治療の再評価から、生薬材料に対する実際的・理論的貢献を求める要求が、治療界に湧出し、特に医薬の本場・大阪では、これらの課題が直接に先生の両肩に懸かって来ました。更にまた、健康問題に知的関心の高まった一般市民に対する啓発活動も米田先生に期待され、ここに先生は、学内外・国内外に活躍の場が広がり、それこそ孤軍奮闘の学園生活を余儀なくされ、そして大きな業績を積まれました。

今回の、日本薬史学会賞の対象となった「緒方洪庵の薬箱とその生薬」に関する諸研究もその一部で、本学会としては先生の広範囲にわたるご活躍を高く評価するものであります。今後とも、広く高い立場からのご指導を祈念しております。

授賞対象：「緒方洪庵先生の薬箱とその内容薬物について」薬史学雑誌 第31巻(1996年)ほか薬史学雑誌所収の諸論文

授賞理由要旨：永年にわたり、本学会会員および理事として活動される中で、生薬学研究を駆使して、わが国第一級の史料となる「緒方洪庵と医薬品」に関する研究を完成され、当時の薬物治療の実態について新たな視点を示されました。

米田該典先生の略歴：

本籍・生年月日	1943年4月1日(兵庫県)
現住所	吹田市桃山台2-3-1-501
最終学歴	1970年(昭和45年) 大阪大学大学院薬学研究科後期過程中退(就職のため)
職務略歴	1970年(昭和45年) 大阪大学助手(薬学部)
	1978年(昭和53年) 大阪大学助教授
	1999年(平成11年) 大阪大学大学院薬学研究科
	2006年(平成18年) 大阪大学大学院医学研究科

業績目録(抄)：

緒方洪庵先生の薬箱とその内容薬物について
　米田該典、前平由紀、緒方裁吉　薬史学雑誌、31、171(1996)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(1)「将軍」について
　米田該典、前平由紀、A. H. M. MAWJOOD、緒方裁吉　薬史学雑誌、31、174(1996)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(2)「栴那」について
　米田該典、A. H. M. MAWJOOD、前平由紀、緒方裁吉　薬史学雑誌、31、178(1996)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(3)「莨根」について
　各種トロパンアルカロイド含有生薬および品質評価
　米田該典、前平由紀、橋本公子、後　淳也、緒方裁吉　薬史学雑誌、32、178(1997)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(4)「摂綿」について
　米田該典、前平由紀、後　淳也、緒方裁吉　薬史学雑誌、32、190(1997)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(5)「甘草」について
　米田該典、前平由紀、王　群、緒方裁吉　薬史学雑誌、33、35(1998)
緒方洪庵の薬箱とその生薬(6)「桂枝」について
　米田該典、前平由紀、緒方裁吉　薬史学雑誌、33、39(1998)
緒方洪庵のくすり箱
　大阪大学出版会(2001)

和漢薬の本草文献的研究(第4報) 狼毒について
　難波恒雄、米田該典、高橋真太郎　薬史学雑誌、9、1(1974)
和漢薬の本草文献的研究(第5報) 大戟について
　難波恒雄、米田該典、高橋真太郎　薬史学雑誌、9、9(1974)
伝統売薬「ウルユス」について(1)
　米田該典、前平由紀、A. H. M. MAWJOOD、岩井鑛治郎、野尻佳代子
　薬史学雑誌、31、96(1996)
伝統売薬「ウルユス」について(2)
　米田該典、前平由紀、A. H. M. MAWJOOD、岩井鑛治郎、野尻佳代子
　薬史学雑誌、31、103(1996)

京都の医薬史跡一覧
　米田該典　薬史学雑誌、22、12(1987)

所属学会など(抄)：

日本薬史学会、文化財保存修復学会、日本生薬学会、日本東洋医学会、ブラジル生薬学会、ブラジル地理学協会名誉会員
アルバレス・カブラル勲章(ブラジル国 有用植物開発の功労)

医薬史蹟の旅のついで・ヨーロッパの美術館めぐり (2)

—国際薬史学会議(フィレンツェ)のついで・イタリア美術めぐり—

山川　浩司

イタリアの**フィレンツェ**で第34回国際薬史学会議(1999年10月20~23日)が開催されました。以前に文部省の科研費研究班の夜の懇親会の席、この懇親会は昼の研究会の疲れを温泉で流して浴衣でくつろぎ酒を酌み交わしながらの懇親会でした。この科研費の研究会には後にノーベル化学賞を受けた野依教授も参加されていました。この懇親会で野依さんを指導された大阪市大理学部の野崎一先生がフィレンツェの街は美術館都市で良かったと聞かされていましたから、この会議には是非参加したいと思いました。それでこの会議には気楽なポスター発表として「戦後日本の製薬産業発展史」を発表することにして、もっぱらイタリア旅行に専心することにしました。この医薬史蹟の旅には高橋文さんと松本力さんとの三人旅の珍道中になってしまい、それぞれポスター研究発表にしてイタリアの旅を楽しむことにしました。この会議では辰野美紀さんだけ口頭発表、共立薬大の福島さん、松本さんはポスター発表で別行動となりました。三人だけなので今までの旅行社に旅行計画と連絡をとってもらい、ガイドのいない不安な三人旅になってしまいました。この珍道中の三人旅は話すとトラブル続発の取留めのない話になりますのでこれだけに留めて、イタリアの美術館などの話にもどします。

成田から飛び立ちフランクフルト空港の乗換えで、飛行機のトラブルで夕刻にはローマ空港に着くはずが夜遅くになってしまいました。空から眺めるローマの街は美しい眺めでした。夜まで待ってくれた迎えのガイドについてなんとかローマのホテルに泊まり、翌日の午後にフィレンツェに列車で向かうことにしていましたので、午前中をローマの市内観光に当てました。三人で朝ホテルから予定していたローマ市内の観光旅行社にタクシーで向かいましたが、運転手も聞いたこともない旅行社とのこと。予定場所と思われる近くを回りましたが分からず、兎に角タクシーを下りて探しましたがなかなか見つからず、ようやく此処ではないかと探し当てました。時間で店を借りている小さな旅行社でした。それでも何とかバスの出発時間に間に合い乗り込み、怪しげな日本語を操るイタリアの女性ガイドの案内で、**ローマのコロシアム、凱旋門**を見学して歩き、**バチカン広場**で、**システィーナ礼拝堂**のミケランジェロの大壁画を見る予定でしたが、しかし当日この広場はローマ法王の説教に多数の人々が旗を振りながら埋めつくしていたために見学は出来ませんでした。法王の演説はガイドに聞いても分からない言葉だそうでした。しばらくバチカン広場を見て急ぎ足のガイドについてバスまで辿り着き、車内からローマ観光をしながら**スペイン広場、トレビの泉**を見物しました。このバスは途中に数人の客の持ち物だけをバスに残して客は乗り捨てにして回ってしまいました。我々三人組は何とか乗り捨てに合わずスペイン広場近くで半日のローマ観光を終えました。ローマ時代の芸術的建造物などを見て回りましたが、歴史的なローマの観光にはもっと時間をかけてみてみたいと改めて思いました。バスから降りてスペイン広場近くのレストランでパスタを食べて急いでタクシーを拾いホテルに戻り、ローマ駅から特急のユーロスターに乗りフィレンツェ駅に向かいました。新幹線と比べるとスピードはそれほどでもありませんでした。車内で子供だましの菓子が配られました。夕刻にターミナルのフィレンツェ駅でホームにおりましたが、出迎えに来たガイドと反対側のホームに下りたので、しばらくは途方にくれ駅の待合室で休んでいると我々を呼ぶ駅のアナウンスを聞きつけてようやく迎えの現地のガイドに逢い、メディチ家の建造物近くのホテルに落ち着きました。

10月20日の国際薬史学会議の発会式は**フィレンツェ**の有名な**ベッキオ宮殿**で開かれました。ホテルから歩いてベッキオ宮殿の広場に着くと、この広場にはダビデやネピチューン像などがありこの広場は美術館です。宮殿のクラシックな階段を上り周囲は戦争画の大壁画でめぐらされた高い天井の会議場は絵画で埋め尽くされていました。会場でこれらの大壁画を眺め回し威圧される雰囲気に圧倒されながら腰掛けていました。頭の上を分からないイタリア語が飛び交っていました。終了後、折から雨が降り出し10分ほど歩いて中央駅近くの**サンタ・マリア・ノヴェラ寺院**に隣接する**修道院**のレセプション会場に移りました。ここには古い修道院薬局があり中庭の柱に囲われた壁にはフレスコ画の中世絵画が描かれ、そこでワインやサンドイッチの歓迎レセプションが行われ、パリやストックホルムの医薬史蹟の旅で親しくなった人々と再会しました。この会場は中世の香りが満ちていました。この会議中にフィレンツェの目玉の**ウフィツイ美術館**に行きました。普通に行くと長い行列をしなければならないので、ホテルから予約を入れて入場券を手にして向かうと直ぐに入館出来ました。ここには目玉のボッティチェリィのヴィーナスの誕生、ダ・ヴィンチ、ミケランジェロやティツィアーノの名画を鑑賞しましたが、中世の絵画や彫刻像が林立していて息が詰まりそうでした。同行のM氏は中世の宗教画に息がつまり途中で逃げ出されました。フィレンツェの街はどこを歩いても街中、中世のルネサンスの香りで満ち満ちていて、旅から帰ってイタリアの美術番組のテレビ画面で再三放映される毎にこの街を思い出しています。

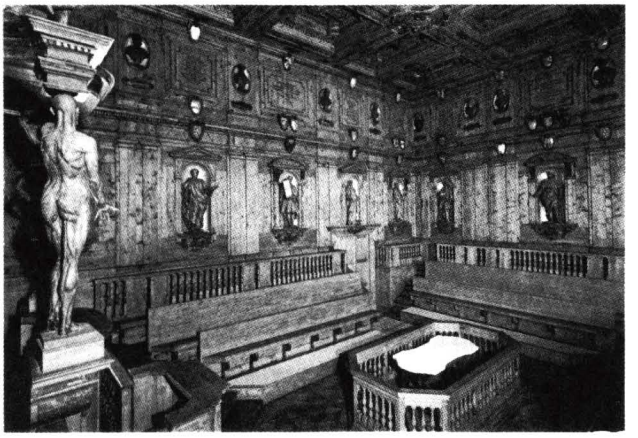
ベッキオ宮殿

会議の最終日に駅近くの国際会議場のポスター会場に張り出してある研究発表のポスターを辰野さんに回収してもらうことを頼み、フィレンツェ駅からユーロスターの一等車に乗り三人旅で**ボローニア**に向かいました。ボローニア市では英語を話すムラザーニ夫人が運転手付きの車で出迎えてくれました。中世の大学都市のボローニアはかっては多数の巨大な塔が林立していた大学街であったようです。今はボローニアの斜塔が有名になっています。街中の建物は柱で街路が続いている街です。駅前の広場にはネピチューン像があり、教会に沿ってボローニア大学に向かう途中に蛙を使い筋肉に電気刺激を与える電気生理学の研究をした**ガルバーニ**(1737～98)像があります。手に持ち見つめる台には蛙が刻されています。ここから近いボローニア大学法学部から中に入ると2階に世界最古の**ボローニア大学解剖学教室**があります。戦争で壊滅的に破壊されましたがその残骸を集めて復元したものは執念とも言えるものでしょう。この教室をはじめ建物の壁や天井の総てに中世の彫刻が施されています。まるで美術館大学のようでした。NATO空軍がいたイタリア基地からユーゴスラビア攻撃に向った時期だったので、町の壁にNO NATOの落書きが随所に見られました。夕刻にボローニアからユーロスターで**パドバ**に向いホテルに入ったのが遅かったので、ホテルのレストランは予約できずバーでサンドイッチと飲み物で済ませま

ガルバーニ像

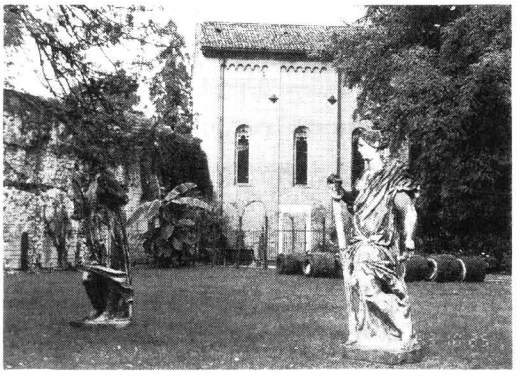
した。しかし翌日もこの目にあうとは思ってもいませんでした。

翌24日は日曜でパドバ大学は見学できないので、三人でホテル近くを通るヴェネチァ行きの高速バスに乗り**ヴェネチァ**の休日にしました。このヴェネチァの旅も波乱に満ちたものでしたが語ると長くなります。前日にヴェネチァの街は大雨に見舞われ町中水にあふれていました。おまけにこの日にヴェネチァの街では国際マラソン大会が行われていて選手は水しぶきを上げながら駆け抜けていました。水にあふれたサンタ・ルチア広場に架設された桟橋を渡って黄金に輝く**サン・マルコ寺院**を見学し、その後は迷路のような所々水浸しになった街中を歩きまわり、運河の橋を渡り**サンタ・マリア・ディ・フラーリ教会**に入り大壁画を見ました。薄暗い堂内でしたが圧倒されました。ヴェネチァで夕食をしてパドバに戻る積りでしたが夕刻からまた雨が降り出したのでパドバに戻ることにしました。しかしこのパドバ行きのバスは来た時の高速道路を通るバスでなく、倍くらいの時間がかかる街中を巡る路線バスで、ホテルを遠くに望む所に辿り着いた時には夜遅くなりました。夕食は先に記した通りになりました。この夜、フィレンツェから駆けつけた辰野美紀さんと落ち合いました。



ボローニア大学解剖学教室

翌10月24日月曜日の午前中はパドバ大学の卒業式で大学は見学できないので、我々に辰野美紀さんを加えた四人組は若い女性ガイドに案内されて、ヨーロッパ最古の1545年設立の**オルト・ボタニコ植物園**に行きました。園内はよく整備されていて日本から送られた雌雄の公孫樹が見事でした。またゲーテがイタリア紀行で立ち寄り長い事見つめていたというシュロの大樹は建屋に保存されていました。植物園から**スクロウェンニ礼拝堂**の見学に行きました。堂内のジオットの最高傑作といわれる聖母マリアとキリストの生涯を描いたフレスコ画の壁画は見事でした。四国の鳴門の大塚国際美術館にこの礼拝堂の実物大のレプリカ陶板壁画を以前見ましたが、実物の青色はもっと落ち着いた色調でした。昼食後に**パドバ大学**に向い柱廊に囲われた校内は多数の卒業生とその家族で華やいでいました。大学ではガリレオの教壇、コペルニクスやヴェサリウスを輩出した巨大な大階段教室の**パドバ大学解剖学教室**を見学しました。これらの栄光ある人々と卒業生の紋章などで教室は華やいだものでした。



スクロウェンニ礼拝堂

パドバの一日が終わり辰野さんとはここで別れ、3時過ぎに3人組みは用意された車に乗り、北イタリアの平原を遠くのアルプスの山なみを眺めながら、一路最終目的の**ミラノ市**に高速道路を飛ばし、夕刻に巨大な石造物のミラノ中央駅近くのホテルに入りました。ミラノの街には市内の路面電車、バスと地下鉄が動いていました。

ミラノ観光で真っ先に訪れた所はダ・ヴィンチの最後の晩餐の壁画がある**サンタ・マリア・デレ・グラチェ教会**でした。我々三人にガイドはイタリア人と日本人の二人という贅沢のものでした。ガイドに

は必ずイタリア人の専門ガイドが付かなくてはならないようです。この教会には大勢の人が列を作っていました。グループの人数には割り当ての定員があるらしくガイドが人数の少ないグループに交渉して、その中に加わり早く入館できました。ガイドの収入にもなるのでしょう。20名ほどに分けて礼拝堂の館内に案内して15分ほど壁画の鑑賞をさせていました。修復された「ダ・ヴィンチの最後の晩餐」の壁画は、元の絵に上塗りされた絵の具を剥いでもとのダ・ヴィンチの絵画に復元した薄ぼやけた色彩の大壁画でした。この復元では剥げ落ちて薄くなって絵具に筆で彩色したものではないとのことでした。人物や食卓の食べ物は修復以前の壁画と大変違っているようです。後にダ・ヴィンチ・コードで有名になった解説から、キリストにグラナダのマリアはぴったりするようです。この絵画はなるほどと思い直しています。

次に「**レオナルド・ダ・ヴィンチ科学技術博物館**」に行きました。僧院を博物館にしたものでダ・ヴィンチの建築、人体解剖などを盛んに行ったスケッチの絵画の展示が目を引きました。最後は街の中心のスカラ座、最古の立派なアーケード街のガレリアと巨大なゴシック建築の**ミラノ大聖堂**を見ました。装飾過剰な大聖堂の内部に入るとこの時期だけ展示されているという絵画が下げられ、自慢のステンド・グラスの光が遮られていました。ガイドさんとは此処で別れてからミラノの名店街を覗き見して革のカバンやバックなどをそれぞれ求め、しばらくミラノの街を見物してから地下鉄でホテルに戻り、午後の飛行機でミラノ空港を立ちフランクフルト空港で乗り継ぎして成田に帰ってきました。ここで一先ずヨーロッパ美術館の旅は終わることにします。

世界の中でもあらゆる地方都市にも多数の美術館がある日本で、全国美術館会議編「全国美術館ガイド」(美術出版社)をガイドブックとして、日本の医薬史蹟めぐりのついでに美術館めぐりをされてはいかがでしょう。第38回国際薬史学会議はスペインのセリビア市で2007年9月19~22日に開催されます。かつて世界制覇したスペインは世界有数の世界遺産と美術館を誇っています。このスペインの国際薬史学会議に参加されて旅に出られたらいかがですか。

◆北海道支部だより

北海道医史学研究会・当会北海道支部「第1回合同学術集会」報告

山　朝江(やま内科胃腸科医院、函館市)

はじめに

薬史レター第44号で予告の通り、表記2団体の「合同学術集会」が、少雪で開催が危ぶまれた雪祭りの札幌で開催された。幸い直前に雪が降りホットしたが、合同学術集会は1月27日(土)、北海道医師会・薬剤師会の後援で北海道医師会館で開催されました。聴講の印象を記したいと思います。

最初に、出席状況ですが、学術集会には57名(医史学研究会会員と関係者：22名。当支部会員と関係者：35名)、懇親会には40名(医史学研究会会員と関係者：11名、当支部会員と関係者：29名)の参加者がありました。

開会の挨拶

北海道医史学研究会 会長 飯塚 弘志：日本薬史学会北海道支部は平成16年に創設された将に昌運の気に溢れた団体である。本学術集会を契機に互いに切磋琢磨し合い、北海道の医史学研究に裨益することが出来れば喜ばしい。

北海道薬史学会北海道支部 支部長 斎藤 元護：当支部は平成16年11月創設、現在、日本薬史学会で定期的に活発な支部活動を行っている唯一の支部は北海道支部であり、翌年10月には当会の年会(札幌)が開催された。本学術集会で、医史・薬史を学び、楽しんで頂きたい。

一般演題Ⅰ 概要 座長 長瀬 清(北海道医師会副会長)

Ⅰ-1 戦時中発疹チフスに倒れた根室の医師達(古谷 統 NPO法人北海道安全衛生研究所)：昭和18年、日本海軍が根室郊外に飛行場の建設を計画し、強制連行の韓国人を就労させた。その際、発疹チフスが発生し、診療に当たった3人の医師が感染し落命したが、その真相解明の結果を報告した。

Ⅰ-2 ベルツ博士の来道と関場不二彦先生の外遊 宮下 舜一(札幌)

「明治30年ベルツ博士の来道とその周辺」を発表後発見された新資料石狩紀行と関場の突然の外遊決定には、ベルツとのアイヌ人種研究を巡る心情的交錯が大きな影響因子として浮上した。その経緯について報告した。

Ⅰ-3 関場不二彦「西医学東漸史話」の仮製本について(紙上発表)

○泰 温信(札幌社会保険総合病院)、島田 保久(元町整形外科)

「西医学東漸史話」は上・下巻と余譚合わせて1319頁にもおよぶ大著で昭和8年に、東京本郷の吐鳳堂書店より出版されている。これは西洋医学が東漸して日本に入って発達していったことを外科の領域から記述したもので、上巻の仮製本を島田が入手しており、表紙の見返しの他33頁にわたる書き込みについて紹介した。

一般演題Ⅱ 概要 座長 斉藤 浩司(北海道医療大学薬学部教授)

Ⅱ-1 ホシ伊藤の創業者 伊藤経作の生涯(Ⅰ) 星一との邂逅 本間 克明((株)北海道医薬総合研究所)

合併で「ほくやく」となった「ホシ伊藤」だが、帯広を発祥に全道をカバーする医薬品卸として北海道の医薬品流通に果たした役割は大きい。創業者の伊藤経作の生涯を辿りながら、彼が社名「ホシ」の冠に拘わった経緯を紹介した。

Ⅱ-2 ドイツ帝国函館領事 L. ハーバーと星一

○山 朝江(やま内科胃腸科医院・薬)、三澤 美和(星薬科大学)

函館日独教会は例年「ドイツ領事ハーバーの遭難追悼会」を行っている。星薬大創立者の星一は当地に眠るハーバーの新たな墓碑を建立、ドイツへの基金など日独文化交流にその足跡を深く留めたが、その足跡を辿った。

Ⅱ-3 北海道薬科大学創設胎動期の新事実 ○吉沢 逸雄(日本薬史学会)、中川 収(国史学会)

昭和40年代末、小樽市に北海道理科大学(薬)なる私大設立の動きがあり、その構想は昭和49年開学の北海道薬大に近似する点が多い。今回、理科大の設立に関する資料が見つかり、これを基に両者の繋がりを調べた。

特別講演 座長 片岡 是充(医療法人讃生会宮ノ森記念病院理事長)

北海道の医療—明治初期の医制・開業免状の推移—

島田　保久(日本医史学会評議員・北海道医史学研究会代表幹事)

明治政府は明治 7、8 年(1874～5 年)に「医制」を布達したが、その目的は、西洋医学による医学教育を行い、医師の開業免許制度を実施し、医薬分業の体制などを確立するためにあった。また、各地に医学校の設立を図った。北海道ではどのような経緯をとったか、資料から見解を述べた。

閉会挨拶　竹内　伸仁(北海道薬剤師会副会長・日本薬史学会北海道支部幹事)

日本医史学会は明治 25 年設立、平成 19 年 4 月には大阪で第 108 回総会が開催の予定。北海道においても、昭和 61 年札幌医史学研究会が発足し、その後北海道医史学研究会へと発展。歴史と伝統のあるこの同研究会と共に合同学術集会を開催出来ますことは当支部としても光栄かつ名誉なことと喜んでいる。

おわりに

懇親会は、予想以上の出席者で賑わいました。2000 円会費の軽食とビール、程よい時間、両会員の又とない顔合わせ、交流の場になりました。かくして、記念すべき合同学術集会は着実に 1 歩を踏み出しました。来年度からは年 1 度のペースで秋に開催の予定です。　(以上)

日本薬学会第 127 年会(富山) 参加記

五位野　政彦

雨が降っては止み、降っては止みを繰り返している。

富山駅へ向かう列車の車窓からは、見えるべき立山連峰は見えない。どんよりとした雲だけが空を覆っているだけである。

しかし、車内は薬学会に参加するのであろうスーツ姿に荷物を携えた老若男女でいっぱいであり、悪天候であっても薬学会が盛況になることが予想される。

事実、「薬学史」会場である富山市総合体育館は、まさに歩くことも立ち止まることもできないほどの参加者で混みあっていた。体育館にいる参加者は自分の意思とは関係なく、まわりの人々に押され、止められ、動かされながら移動しているのである。

今回の薬学史系の発表は 6 題。いずれの発表でも、演者がなんとか聴衆の流れに押されずに示説や質疑応答を行なっていた。うち 2 題は、今年も高校生も参加した研究グループの発表があった。インターネットで入手した「理礼氏薬物学」の研究発表である。薬史学に関心をもつように指導する高校教師がいるのは心強い。

宮崎県の医学・薬学史を九州保健福祉大学の山本郁男氏が発表されている。また、塩原仁子氏(昭和大学)は『呉晋本草』を、三澤美和氏(星薬大)が、星一の関東大震災での救援活動についての発表を行なっている。伊藤裕子氏(政策研)は、論文による薬学研究動向の分析を発表された。

筆者は宮本法子、川瀬清両氏のご協力を頂いて「戦前の日本漫画のらくろに登場する薬学的事項」を発表した。お二人には申し訳ないが、このスペースだけがすこし周囲と違う雰囲気があったように思う

のは被害妄想であろうか。

今回のポスター発表での掲示用パネルは、押しピンが刺しやすい構造になっており、掲示作業が大変楽であったことを特記したい。

筆者が逗留した宿の女性主人によれば、富山市内では数日前の能登半島地震の影響はあまり無かったとのこと。天・地・人共、無事に、否、盛大に終わった薬学会であった。四十数年ぶりの開催を果たした富山県関係者のご努力に頭が下がる思いである。

付記：①懇親会(全日空ホテル)での富山市長のあいさつ。「このような立派な学会が行なわれるならば、ホテルをあと3つくらいは建てたい」という発言であった(市内の宿泊は大変であった)。
②懇親会場で喫煙を許しているのは薬学会の悪しき伝統である。

「駒場御薬園と本草学」狭山市立博物館の春季企画展をみる

小倉　豊

江戸目黒にあった幕府直轄の駒場御薬園に係わる資料展が、狭山稲荷山公園内にある狭山市立博物館で、3月10日から6月3日まで開催された。

この御薬園の園監であった植村家の資料所蔵者が現在、狭山に在住されているのでその協力で実現したそうであるが、この植村家というのは、幕府の役人であり、御薬園で薬用植物の収集と育成栽培を行い、その業績は、江戸時代後半の医療に大きく貢献しただけでなく、本草学の基礎となる分類同定を定め、本草学の発展に重要な役割を果たしたという。

今回は、この植村家に残された御薬園の関連資料と共に当時の医薬学書の数々を展示し、その変遷を紹介するものであった。

本草学の流れを知る上で、大変、見ごたえのある企画展であった。

事務局よりのお願い

(1) 平成19年度の会費を同封の振替用紙で至急納入下さるようお願い致します。
(2) 薬史レターへの投稿をお待ちしています。薬史学会通信No.41に掲載されている「薬史レター投稿のヒント」を参照下さい。